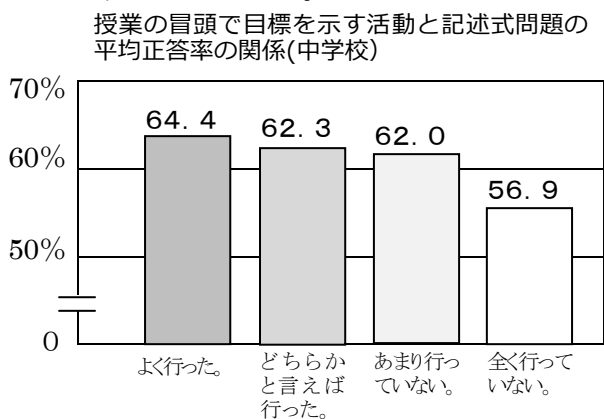


本校では、「誰もがわかる喜びとできる楽しさを味わわせる授業」づくりに努力している。そのアプローチとして、学習自体をシンプルにすることが試行されている。決してレベルを下げることではない。そのために、教科の本質を見失わず、子どもの必要感と必然性を重視し、ねらいの焦点化と学習内容の絞り込みを問い続けている。つまり、授業の冒頭(絶対ではない)で目標(めあて・ねらい)を示し、終末に学習したことを振り返る活動に大きく関与することであり、学力の定着・向上にも直結する。

そこで、まず「めあて」の状況について述べてみたい。平成25年度全国学力・学習状況調査(中学3年)のクロス集計の結果を見ると次のグラフのようにになっている。



このことから、めあてやねらいを示す活動を積極的に行った学校ほど、国語B問題の記述式問題の平均正答率が高い傾向が見られる。「よく行った」と「全く行っていない」の差は実に7.5ポイントある。

本校6年生の場合のめあての提示について、肯定的にとらえた教員は100%で、児童は87.4%となっており、12.6%の差が生まれている。決して悪い数字ではないが、この差をどう見て、どのように考えるかである。この数字から、教師はめあてを提示しているが、各学級3~4人の子どもには認識されていないことになる。

もともと、めあては今日の学習の方向性を明確するものであり、子どもたちに見通しをもつとも考えられる。本校の板書にあっためあては、

- ・じしゃくの力はじしゃくのどこが強いのだろうか？
- ・こんでいるのはどちらかな？
- ・長いすは何きゃくいるのかな？
- ・中心人物ワタルの何が変わったの？
- ・円グラフが書けるようになる。
- ・いろいろな複合語を見つけよう。
- ・1m や1Lより小さい長さやかさを表そう。

など、疑問型と行動目標型が多いようである。

改めて考えたい。めあてをなぜ書くのか。「わたしたちのめあてではない。」「やりたいとは思わない。」など、子どもから距離があるめあてで良いはずはない。さらに、めあてに書いたことが「振り返り」で約束されることも重視されなければならない。「じしゃくの力はどこが強いのか」というめあてに、事実やデータなど根拠を交えて、「～だから、ここが強いと言えることも大切である。紙幅が尽きたが、振り返りは向上的変容を自覚する場であり、今日の学習内容の定着を確認する時間でもある。(芝)

ねらい
ねらった目標。意図。

めあて
事をするときの到達点・基準などとして心に決めていくこと。



分数×整数の計算ができるようになろう

ふりかえり

学習を次の3点から振り返り、客観視できるメタ認知能力も養いたい。

- ・今日の自分を振り返る。
- ・今日の友だちを振り返る。
- ・今日の学習内容をふりかえる。

このふりかえり活動の中に授業評価を入れたい。